
生徒会の中で

キカユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の中で

【Nコード】

N2417J

【作者名】

キカユキ

【あらすじ】

ある学校の生徒会副会長山井・勇輝と会長倉井・優衣の学園恋愛小説。

キス！？

「失礼しますよ」

と、言いながら僕は扉を開いた。生徒会室の扉を。足を一步前に踏み入れるとそこには生徒会会長倉井・優衣がいた。僕の顔の前に倉井の顔が見える。鼻と鼻が触れる距離にあった。倉井の口から出る息が僕の顔にかかる。甘くいい香りがする。美人の倉井の目が僕の顔を見つめていた。僕は心臓が今にも弾けそうになるぐらいにドキドキしていた。そりゃ好きになつた人がこんなに近くにいればドキドキぐらいする。体が震えていた。顔もほんのり赤くなっていた。倉井が語りかけてきた。

「ねえ、今どんな心境？嬉しい？」

嬉しい？そんなもんじゃない。ヤバイ。萌える。だがこんな心境言えるわけがない。だから、

「う・うれしいか？って言われれば嬉しいかな。」

「じゃあさ。こんなことされたら嬉しい？」

倉井は僕の顔の頬に手を当ててきた。しかも両手で両頬を。それはまるでドラマに出るようなキスシーンそのものであった。倉井は顔を左に傾けて口を閉じ唇を僕の唇に向けてゆつくりと押し付けてきた。倉井は目を閉じていた。会長倉井も顔を赤くしていた。だんだん近づいてくる倉井の唇。いきなりだつたものだから倉井を遠ざけようと手を伸ばそうとした。だがその抵抗も倉井に止められた。頬にあつた手は僕の背中に戻っていた。その手は僕の腕ごと抱きしめていた。体と体が触れていた。顔が真っ赤になるのがわかる。会長の倉井も真っ赤だった。そしてとうとう唇と唇が重なり合った。

<キス>

ようやく僕の頭は理解した。これがキスだということ。初めてのキスだった。抱き寄せられ一方的なキスだった。でもそれは正真正銘のキスだった。目を僕は見開いた。倉井は真っ赤な顔をしていた。

静かな朝。誰もいない校舎。二人しかいない生徒会室。僕には聞こえた。倉井の心音が。すごく速くドキドキしているのがわかる。僕に聞こえているなら倉井にも聞こえているのだろう僕の心音が。顔が熱くなりすぎたのだろう僕の思考を無視して僕は倉井を抱きしめていた。

ゆっくりと時間が過ぎていく気がした。ようやく倉井はキスをやめた。だがまだ抱き寄せあっていた。倉井がはあはあと吐息を漏らしていた。僕も吐息を漏らした。この一面だけを見るとただの変態である。

「う・うれ・うれし・・・かった？」

倉井の声は震えていた。

「あ...う・うん...」

僕は正直に言った。

「ちょ...ちよと...離れて...」

「お・おう。」

僕は抱き寄せるのをやめ廊下に出た。まだ体は熱い。

「は・初だったんだから...」

「何が？」

「だから。キ.....」

「キ...ってなんだよ？」

「キス...」

その言葉に驚いた。こんな僕に大事な初をしてしまったなんて。僕はどけ座をした。

「ごめん。」

「誤らないでよ...嬉しかったならいいの。」

倉井はまだまっかだった。

キス！？（後書き）

これからも書くので指摘（死ねなどなしで）ありましたらよろしく。

キス！？2（前篇の中の前篇）

僕は顔をあげなかった。そう今の今まで初キスをしていたのだから。

さて今話を聞いた人がいるならあえて言おうH系ではないと。

「あんた何ぶつぶつ言ってるの？もしかしてあんたも初？」

「う・うん。」

「え…嘘だよね…」

「いや嘘じゃないし…」

「う…嘘だ！」

「やめーい。ひ○らしネタは。」

「え〜なんでばれたの？そんなことどうでもいいの！本当に初なの？」

倉井はあせっていた。

「あゝ初キスだったよ。こんな形になるとは思ってたけどな。」

「ごめんね。初だとは思ってなかったから…」

キス!? (前篇の中の後篇)

「なあ。なんでキスなんてしたんだ？」

倉井は今椅子に座って机に顔を伏せていた。倉井は小さな声で言った。

「暇つぶしにかな？」

「暇つぶしって…なんかのアニメにもあったなそんなシーンが。なんだっけ…」

「あれよ。新世〇エ〇アンゲリオンのア〇カとシ〇ジがやったことよ。」

「…てそんなこといいんです。暇つぶしでするって頭大丈夫ですか？」

「だ・大丈夫よ。あんたこそ頭大丈夫なの？」

倉井は顔を上げて質問してきた。真つ赤な顔でこつちを見て。

「頭は大丈夫だよ!というか倉井さんのほうこそ大丈夫ですか？」

「何回言わせるの!」

「2回です!」

「はあ。大丈夫ですよ。私はね。あんたは違うけど。」

「倉井さんのこと好きだっていうカツコイイ人いっぱいいるんだから、そういう人にしてやればよかったじゃないですか!なんで僕なんか…」

「う・そ・そりゃああんたがいつも暇そうにして私に何にも話してこないからちよつとでも話せるようにしたかったからよ!」

今のセリフは僕にとってすごくうれしいものだった。僕と話したいと言ってるようなものだったからだ。

僕はなぜか泣いてしまった。

キス！？（後篇 倉井視点）

何で山井君は泣いているのか私にはわからなかった。いろいろと考え、でてきた答えを考えると死にたくなかった。

（ブスな私とキスなんてしたからだ）

今に思う。何であんなことをしてしまったのだろうか。いや本当は私は山井君が気になっていた。でもなかなか話かけれなかった。いろいろと聞いてみたかった。でも話せなかったからこんなことをしてしまった。私はとんでもないバカだった。語りかけられないのは私のせいなのに山井君にキスなんてしてしまった。聞こう山井君が私のことをどう思っているのかを

「ね・ねえわ・私のことどう思ってるの？嫌い死ねばいいとか思ってる？それともそ・その私のことす・す・好き？」

「え・えーと…言えないですよそんなこと。」

やっぱりね…死ねって思われてるんだ。山井君は優しいから言わないんだ。でも言っただけほしいホントの気持ちを知りたかった。だから「どう思ってるの！私のこと！」

「好きか嫌いかって言われたらそ・その…す・好きかな。会長がかわいから…」

「ありがとう嘘でも嬉しいよ。」

「う・嘘じゃないよ。で・でも好きなのは友達としてですから。」
「いいよそれでも。」

時計はAM：6：00と示していた。

会話1山井

僕は倉井さんに聞きたいことがあった。僕のことどう思ってるのか？倉井さんも聞いてきたのだから聞いてもいいだろう、と決心する。「会長は僕のことどう思ってるんですか？いきなりき・キスなんてして…」

「あなたと同じ気持ちだよ。」

会長は顔を真っ赤にしてこっちを見ていた。かわいい顔を見ているだけで僕の顔は真っ赤になった。

「何顔赤くしてんのよ。そんなにキスが嬉しかったの？それとも私に萌えた？」

なんて会長だ。からかうといつてもすごいセリフだ。萌えたかなんて普通言わないぞ。

「実際のところ言つと…ちょっと萌えました。」

何言ってるんだ僕は。かなり恥ずかしいセリフを堂々と言ってしまった。倉井の顔はマグロの赤身ぐらいに赤かった。いわゆる真っ赤だった。口からちょっとよだれが出ていた。倉井は僕のセリフを聞いて焦っているんだろう。よだれのことには気づいていない。僕は見ているもつとからかいたくなった。

「本当はすつごく萌えました。今も萌えています。」

「やつ…嘘…え…本当に…萌えて…う…嘘…」

真っ赤だ完全に真っ赤だった。倉井はよだれに気づいて手でぬぐった。

「ええ〜萌えていますよ。」

「ちょっと…その…え…う…え…」

倉井は顔を真っ赤にしながら僕のところへ歩いてきた。そして…

会話2 倉井

私はまた山井君の前に立っていた。さつきよりは遠いけれど近かった。私の顔は真つ赤なんだろう。自分でもわかるすごく熱い顔から体まで熱い。そして私は言った。

「山井君許さないよ。ちょ・ちょっとからかいすぎじゃないかな？」

「ご・ごめんなさい…。」

「だから許さないって！」

「そこを何とか…」

ここまで弱気の山井君を見たことがない私には許したいという気持ちが生えていた。

「じゃ・じゃあい・今から言う質問に正直に答えたら許してあげる。許してあげるって私が言ったらもう正直に答えなくていいから。」

「わ・わかった。」

「じゃ言うね。私と書記の粥見ちゃんと実行委員の久美ちゃん、どの人と付き合いたい？」

「…えつと、か…」

(やっぱりね粥見ちゃんのほうが好きなんだ…)

「か・会長…」

「え…私？」

「う・うん。」

さらに顔が熱くなった。

「じゃ・じゃあさつきの萌えたつての本当？本当ならどこに萌えたの？」

「本当です…萌えたところはか…かわいい顔です。」

また顔が熱くなった。体が震え始めた。

「さ・最後の質問。今までの答え正直に言った？」

「はい…」

ちよつとからかうかな…

「私のこと好き？友達としてではなく。こ・恋人として。」

「う・うん好きだよ。前から好きだったよ。だから付き合ってください。」

「へえ？」

（ちよっとまってよこれって告白なのかな）

「これって告白なの…。」

「うん…。」

「何で告白したの？からかってるってわかってたでしょ。」

「うん。わかってたよ。でもまだ許してあげるって言われてなかったから正直に言ったんだよ…。」

「あ…じゃあ許してあげる。これで終わりね。」

私の前にいる山井君は力なく壁に背中を付けていた。

しばらく沈黙が続いた。私は力を込めて言った。

「私もあなたが好き。だから付き合ってください。」

山井君は驚いていた。そして

「僕のほうこそよろしく。」

と力なく言ってくれた。

キス！？3（前篇）

ひよんなことから僕と会長は付き合うことになった。今日の前に立っている倉井さんと付き合うことになった。

「ねえ〜ふ・普通さこうなったら男子ってキスしてくるもんじゃないの？」

「どんな普通ですか？それは」

「いいじゃない。涼宮ハ○ヒのキョ○みたいにさ〜それと敬語やめてよ恋人同士になっただから。」

「うんわかった。でなぜキス？というかハ○ヒ見てたの？」

「全部見たわよ。マガツレとかウツディとかね」

「ハ○ヒねた止めてください。しかもひ○らしネタもやめてください。」

「なんでよ。何でやめなきゃいけないの！って敬語やめろ！」

「うん。で本題に入るよキスしないといけない？」

「う・うん」

「やっぱり無理ですよ。キスなんて！」

「意気地なし……」

「ごめんね意気地無しでさ！……」

「ガン○ムSE○Dネタ止めなさい。」

「ア○ルのセリフをちよつと変えただけだよ。」

会話3 山井

「すまん…やっぱ無理だ…」

「嘘だ！」

「だからひ○らしネタ止める。ハマっただろそのセリフ。」

「うん！」

「素直でよろしい。」

「いいからキスしなさいよ！」

「倉井ちよつと変態にみえるぞ…」

「うっ…わかつたよ。でもあんたが悪いんだからね！」

「なんでそうなるの！」

「あんたが裏切るから…！」

「裏切つてないし！シ○・ア○カのセリフもだめ！」

「いいじゃんかー」

今に思う倉井との距離が縮まった気がする。今日早く来てよかったよとしみじみ思う。

「のわぁー！」

「あははは〜」

急に倉井が後ろに回ってC○Cをかけた。ス○ークなみにうまいC○Cをくらった僕は身長152cmの倉井に投げ飛ばされたのだ。(ちなみに僕174cmです。山井からでした)

「痛い！」

「どうよ…！」

「おいおいなんか僕したか!？」

「してないよ。何にも。それと僕つての止めなさい。」

「はいはい。で俺が投げられた理由を教えろよ。」

「内心小さいって思ったでしょ。」

「う…」

「やっぱりね…山井のバカー！」

と話していると生徒会室の扉が開いた。

キス！？3（後篇）

扉が開いた先には書記の粥見・春香だった。

「お、元気そうだね。ん・何かあったの？」

俺は力ない声で床にたたきつけられた状態で言った。

「ま、いろいろと…」

「ふうんそんなに顔が赤くなることをしたんだ。ということは優衣成功させたんだね。」

「あ・うん！」

「そっか！頑張れよ！山井君も優衣悲しませないようにね。彼氏らしく接してやってよ。」

「なんでしてるんですか？俺と倉井が付き合うこと。」「
気になるので聞いてみたら…」

「あ・説明してないんだ。ま・当り前かな。教えてあげるよ。私と優衣が昨日の帰り道に作った作戦だったんだよ。」

「作戦？」

「うん。そう作戦。勇輝君に告白したいって優衣が言ってきてさ作戦作ってあげたんだ。最初は私が用があるってあなたを呼び出した。電話でね。」

「あー。思い出した昨日呼び出したの粥見さんだった。」

「忘れてたのに学校に早く来たの？まいいや。であなたが学校に来た。そして生徒会室に来た。扉を開けたら優衣がいたでしょ。身長さが20cmぐらいあるのに鼻と鼻が触れるとこにいたでしょ。それはこの廊下と生徒会室の段差が20cmあるからね。」

「なるほど。で…」

「そこで好きって言ったら？というのが作戦だったよ」

「あれ…俺その作戦と違うことされましたよ。」

「え…何したの？」

「山井言わないで…」

倉井の力の抜けた声が聞こえた。

「あー言わないよ。てか言えないよ。」

「ふ〜ん優衣と勇輝君言わないと！二人が付き合ってること言いふらすよ！」

「ずるいよー春香！し・仕方ない言っつていいよ山井…」

「あ・ああわかった言うよ…キ・キスされた。いきなり…」

「ぶはははははははあああーキスしたんだ〜しかも告白前に〜」

「笑わないでよ！わ・私だっつてしたくてしたわけじゃ…ないわけでもない…ただ告白した後だっつたら振られてると思ったから…永遠にキスできないと思っつたら体が勝手に…」

「で・告白したの？」

「いや俺から告白したんだけど。」

「ぶはははははははあああああ」

で、ここから俺と倉井で今までのことを説明した。

「あやしい…」

「何がですか？」

「怪しいのホントに勇輝君が優衣のこと愛してるのかが！」

「じゃあ信じてくれないんですか！」

「当り前よ！だっつて勇輝君が優衣にキスされてしてないもん！しかもキスするのを拒んでるじゃない！信じてほしいなら今ここで優衣にキスしなさい！」

「いやそれは…無理恥ずかしいし…倉井に悪いし…」

「いや私はいいけど…それと倉井っつて呼ばないで優衣っつて呼んでよ。」

「

「わかったよ。でも優衣に今キスはできないですよ。」

「じゃいいよ。言いふらすから。」

「わ・わかりました。優衣ごめん。」

そして俺は優衣の肩を持ち顔を近づけた。さっきとは違った感じがした。ゆっくりと手を優衣の背中に追いやった。ゆっくり抱きしめた。優衣も俺の背中に手をおいた。そして俺は優衣の唇に唇を重ね

た。

会話3人!

俺は優衣にキスをした。そして今は粥見さんに見られたことが本気で恥ずかしくて床に座り込んでいた。

「本当にするとわね〜言いふらすわけないじゃない。」

「え・マジ?キスした俺がバカみたいじゃないですか。」

「いや・それが愛だよ!」

「ななら〇 すたのこ〇たのセリフつかってんですか!」

「あつばれた!」

俺は顔を赤くしつつ

「キス中に言ってたでしょ。カ〇リのセリフパクッタの!」

「私も聞いたよ。「逃げるな!キスするほうが戦いだ!」って」

「あつばれた〜でもキスは長めじゃないんだ。」

勇輝と優衣:「しないよ!てかなんだよそれ!」

「キスを1分ぐらい!」

「黙れ!!」

「ごめん!」

俺は今とっても幸せだった。

優衣のためなら…

あんな楽しい時間は終わり、放課後になっていた。優衣と粥見さんと今歩いて帰っていた。好きになった時の話などをして歩いて帰っていた。だけどこの幸せに満ちた世界はたった一つのできことで終わる。

「あははははは。だから好きになったんだ。」

「ま・そんなとこ。」

「よかったね優衣。」

「う・うん」

俺は優衣のほうに視線をおくった。その時気づいた。優衣の帆に突っ込んでくるトラックが見えた。俺はとっさに優衣を助けるために優衣に向かって飛んだ。そして優衣を安全なとこに突き飛ばした。そしてここで俺はトラックに吹き飛ばされた。ぼやけた目で体を見るや血だらけだった。優衣の泣いてる顔を最後に見てそこで俺の意識は途切れた。

病院で…

俺は目を開けた。そこには白い天井が見えた。手には点滴がしてあった。起きようとしたが、横からの声で止められた。

「起きちゃだめだよ。また血が出るよ。よかった生きてるんだね。」
誰だろう。俺の横にいるには誰だ？いやほかにもいる。2年2組の…いや俺たちのクラスのみんなが来ていた。先生もいた。優衣がこちらを見て泣いてるのがわかる。

「ごめん。私のためにこんな…」

「いいよ。優衣が助かったんなら。」

優衣はまだ泣いていた。それは俺には耐えられなかった。だから、
「優衣耳かして。」

「うん」

そう言いながら優衣は僕のほうに耳を近づけてきた。そして俺は周りの視線を無視し、優衣の頬に軽いキスをした。優衣は顔を真っ赤にしてこつちを見ていた。後ろからは「あいつ何してんだ!？」とか「付き合ってるのかな?」とか「嘘だろ」などの声が聞こえた。今の俺には優衣の声しか聞こえていなかった。

「バカ…でもよかった生きてるんだね。」

「うん生きてるよ。優衣が助かったんならよかったよ。」

「バカ…」

そう言っつて優衣は寝ている俺に横から抱きついてきた。抱きついたといつても、覆いかぶさってきただけだ。俺の耳元に優衣の顔がある。優衣の吐息が耳にかかった。温かい吐息だった。後ろでは「うわー!!」という叫び声があった。でも俺も優衣も気にしなかった。ただ俺は優衣に抱かれゆつくりと眠りについた。

病室で…

俺は目を開けた。やはり白い天井が見えた。体は思うように動いてはくれない。怪我しているのもあるのだろうが、もう一つ理由があった。その理由が分かった瞬間俺の顔は真っ赤になった。優衣が俺の上で寝ていたからだ。寝る前に優衣が抱きついてきたのを覚えてる。優衣はそのまま寝てしまったのだろう。優衣の吐息が耳にかかる。それだけで俺の顔は真っ赤に染まった。

「勇輝…好き…」

「!?!」

それは優衣の寝言だった。体が熱くなった。優衣を起こそう。

「ゆ・優衣起きろ…」

「う・うん？」

「起きたか？」

「うん…きゃあー!」

「ど・どうした!?!優衣？」

「ごめん!勇輝の上で寝て。ごめん。」

「いいよ。でもよく寝れたね。ほかのやつらが見てただろうに。」

「気にならなかった…勇輝のことが気になってたから…」

優衣はゆっくりと俺の上からどいた。優衣の顔は真っ赤だった。

「なあ〜いつか一緒に町行かない…」

「それってデート?」

「う・うん」

「いいよ。行こうね町に。」

(よかったまだ生きていられるんだ。優衣と楽しく過ごせるんだ…)

退屈 勇輝・優衣

<勇輝>

優衣達は学校に行った。帰りに来てくれるらしいけど一人だとさびしいものだ。そうだ優衣と会ったときを思い出してみるかな。

<優衣>

私は勇輝と今は一緒にいない。学校だ。今は学校は嫌いだ。勇輝と一緒にいられないからだ。授業はめんどくさく感じた。勇輝と会ったときのことでも考えよう。

<勇輝>

優衣と会ったのは高校1年の9月の野外活動の時だった。(この学校は小中高一貫教育の学校です。)その時俺のクラスに優衣はいた。でも話したことはなかった。クラス1の美人で周りの美男子ぐらいしか話したことはないだろう。野外活動の班で初めて一緒に班になった。男3人、女3人班だった。俺の班は、まあ面白いことに、カップルが2組いた。書記の粥見さんと俺の友達の河木カップルと実行委員の久美さんと俺の友達の佐加井カップル。あの時は悔しかったな。自分だけ仲間外れだった。付き合っていないというなら優衣もだったけど、あの時の仲間外れは違った。美男子美女たちばかりだったのにおれはただの凡人だった。あの時はなんだか悔しかった。カップル二組はにぎやかだった。優衣もその話に加わっていた。実は俺も話に加わっていた。でも何言っただのかは俺にはさっぱりだった。恋愛話。昔の俺には無縁のものだった。優衣はその時からものにこやかにしていた。俺にも話しかけてくれた。

「山井君って好きな人とかいるの?」

なぐんてことも言われたっけ。

「いないよ。」

俺にはあの時の優衣はただのお嬢様にしか見えなかった。

<優衣>

私は、はじめて話した時の勇輝はみんなとどこか違ったように見えた。他の人は最初は絶対敬語しか使ってくれなかった。でも勇輝は敬語ではなく、友達に話すように話してくれた。あの時は嬉しかった。

「何かやりたい係あるか？」

「うん。ないよ」

なんてかわいく見せたこともあったな。でも勇輝は

「俺が手伝ってやるから、なんかやってみるよ。」

その時から恋人みたいに接してくれた。あの時は勇輝がとてもかっこよく見えた。今もカツコイイけれど。

「じゃあ生活係やるよ。手伝ってね山井君。」

「いいよ。あ・それと山井でいいから。」

「わかったよ。山井。ありがとう。」

あの時から好きだったのかも知れない。顔はイケメンじゃないけど、どんなイケメンよりかっこよく見えた。性格もよくて…勇輝のことを考えるだけで顔が熱い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2417j/>

生徒会の中で

2010年10月12日00時08分発行